

第9章 図書館

1 現状

1) 図書館活動の目標

本学図書館は、学習支援、研究支援、地域貢献を使命において、主として保健・医療系の図書資料の収集に努めている。また、保健医療関連の調査研究支援を目標に、県内医療関係者等の学外者の図書館利用については広く開放している。

(1) 他機関との連携と相互協力

図書館は、公立大学協会図書館協議会、日本看護図書館協会、新潟県大学図書館協議会、新潟県図書館等情報ネットワーク推進連絡会議に加盟している。新潟県中越地震の際は、新潟県大学図書館協議会の「災害時における図書館協力等のマニュアル」に基づき、対応した。平成14年9月には、同じ上越市内にある上越教育大学附属図書館と、相互利用に関する交流協定を締結し、双方の学生および教職員が両図書館を容易に相互利用できるようにした。

また図書館業務においては、NACSIS-ILLに参加する他大学図書館との文献複写依頼および受付、現物貸借、相互利用の推進等を行っている。

(2) 利用者支援

学生には入学時に図書館ガイダンスを行っている。また、各授業科目において図書・文献検索に関する司書による講習を実施している。1年次には主に基礎ゼミナールにて、3年次では看護学演習、特にPBL演習直前に、4年次の専門ゼミナール開講直前には特に文献検索ができるように、指導および講習を行っている。また、年度当初の利用の多い時期は昼休みに「30分でわかる図書の探し方」と題して、館内での蔵書検索方法を中心とした講習を開催し、希望者が自由に図書検索技術を学べるような指導体制も整えた。

教員向けには、外部講師による講習会を平成16年度と平成18年度に実施した。平成18年度は図書委員会主催であった。

文献検索データベースの講習としては、医学中央雑誌 Web の利用講習会を年1回実施しており(平成18年度は中止)、学外者も参加可能としている。

他にレファレンスサービスを随時行っており、その内容は記録し、職員間で回覧、問題点等を検討し合い、サービス体制の均一化およびレファレンス能力の向上に努めている。

2) 図書館の設備

半円形2階建ての明るい館内には、1階に48席、2階に32席の閲覧席を設け、そのうちの5席は持ち込みノートパソコン優先席としている。その他に5席のマルチメディアブースと4席の情報検索用ブースが用意されている。また本学資料コーナー、地域資料コーナー、災害看護・地震資料コーナーを設置し、関係資料の収集に努めている。

館内に設置されている機器類は、利用者用の蔵書検索用端末4台、利用者用プリンター2台、

利用者用コピー機1台、ビデオプレーヤー1台、ビデオ+DVDプレーヤー4台、CDプレーヤー3台、LDプレーヤー2台、テープレコーダー1台である。その他の設備として、平成15年度に新聞閲覧台2台、平成16年度に展示棚1台、図書返却ポスト1台を寄贈いただいた。

平成15年度からは、書架棚サインプレートの番号を配架場所として目録に入力し、同時にWebOPACにも掲載し、資料探しの便を図った。平成16年度に新潟県を襲った中越地震を教訓にして防災・防犯対策に努め、平成18年度にはヘルメット等の防災備品と避難誘導サインを整備し、廊下に防犯カメラも設置した。

3) 図書館運営

(1) 職員体制

図書館の職員は、図書館長1名(兼任)、図書館事務職員1名(兼任)、司書1名(専任)、嘱託司書1名、非常勤職員2名、開館事務嘱託員2名である。平日の業務は司書、嘱託司書、非常勤職員が担当し、平日の夜間と土曜日の開館延長時間帯は開館事務嘱託員が交代で勤務している。

(2) 電算化の状況

図書館業務を効率的円滑にすすめるために、図書館管理システム「情報館 v6」を導入している。WebOPACによる蔵書検索が可能で、インターネット対応蔵書検索用コンピュータ4台を整備している。図書館の入り口にはブックディテクション・システム(貸出確認装置)を備えている。

(3) 開館日時

開館日時は、平日の月～金曜日は9:00～20:30、土曜日は9:30～16:30までである。休館日は、日曜日、祝日、年末年始(12月28日～1月4日)、蔵書点検期間、学校行事日(入学式、卒業式、入学試験等)である。

(4) 貸出冊数と期間

図書館の貸出については、図書館利用規程で定めている(表9-1)。大学院生も教職員並みに借りることができるように配慮した。

表9-1 貸出冊数と期間

学部学生	10冊以内、2週間
大学院生	20冊以内、3週間
教職員	20冊以内、3週間
学外者	3冊以内、2週間

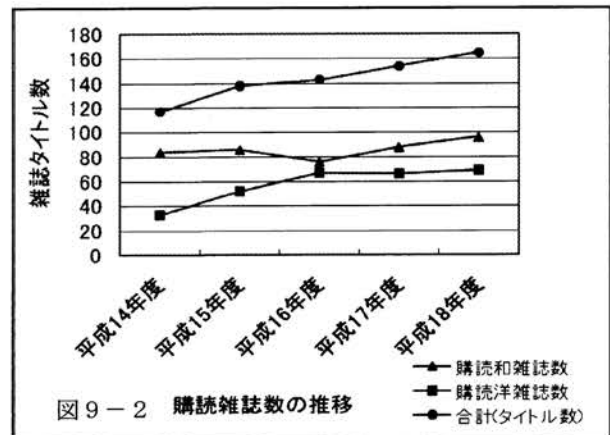
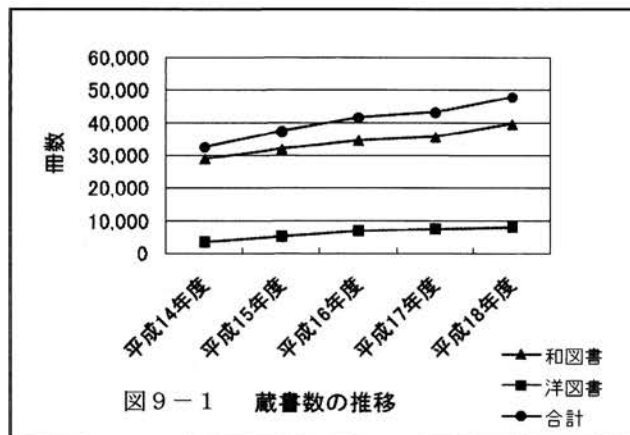
2 図書の整備

1) 蔵書数の拡充

(1) 蔵書数の推移

平成13年度から16年度までの4年間に蔵書数を35,000冊(約1万冊増)にすることを目標に、大学用図書整備費として約2,500万円/年が予算化された。また大学院特別予算として平成17年度に500万円、平成18年度に350万円の図書整備費が予算化され、その結果平成14年度は32,750冊だった蔵書が、平成18年度には47,927冊となり、67%の伸びを示した(図9-1)。ただし、平成17年度までは研究室所蔵図書数は合算されていない。購読雑誌についても、平成14年度は

117 タイトルだったものが、平成 18 年度には 165 タイトルまで増加した (図 9-2)。



(2) 蔵書計画

洋書の所蔵割合を 20% に増す目標を立てて選書をすすめ、現在 17% 台にまで増加することができた。購読雑誌についても洋雑誌の増冊に努め、和雑誌に対する洋雑誌の割合が開学当初は 28.2% だったが、41.8% にまで増すことができた。

(3) 分野別蔵書構成

医学・薬学系図書が最も多く、次いで看護学系、社会科学系、芸術・文学系となっている (図 9-3)。医学・薬学系が 27.8%、看護学系は 25.3% と、医療系図書が半数以上を占めている。看護学系の細区分別構成をみると、精神看護学と老年看護学の図書が他分野に比べ少ない (図 9-4)。しかし両領域の関連図書が他領域に分類されていることもあり、この区分の数値が各専門領域に必要な蔵書数を正確に反映しているかどうかは、一概には言えない。

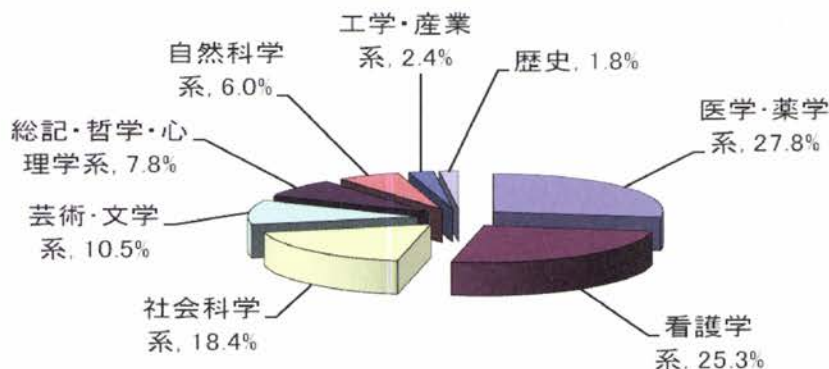


図 9-3 分野別蔵書構成 (平成19年3月現在)

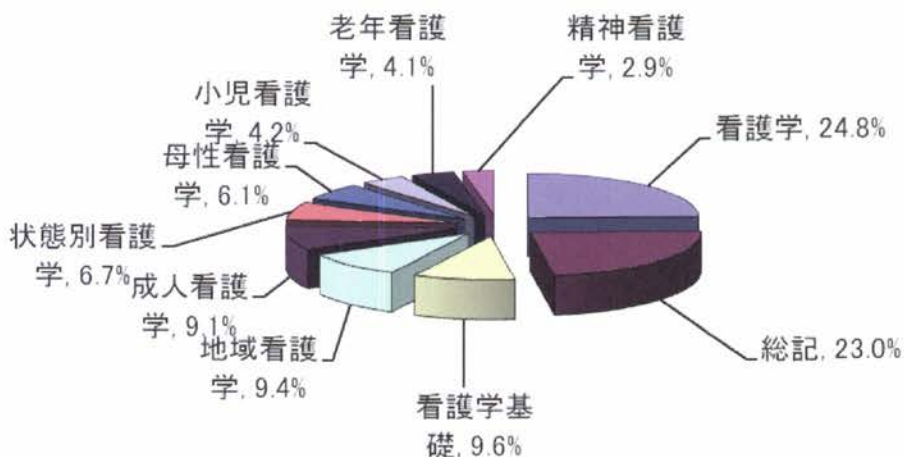


図9-4 看護学領域別蔵書構成(平成19年3月現在)

2) オンラインデータベース等

図書館で契約しているオンラインデータベースは6種類である(表9-2)。予算削減の厳しい中ではあるが、利用状況を見て契約範囲を縮小したり、コンソーシアムに参加して価格を抑えたりして、データベースの維持に努めている。データベースの利用は年々増加していると思われる。

表9-2 契約しているオンラインデータベース

データベース名	導入年度
医学中央雑誌 Web	平成14年度
CINAHL	平成14年度
PsycINFO	平成14年度
Cochrane Library	平成16年度
CiNii (NACSIS-IR から継続)	平成14年度
ヨミダス文書館	平成15年度

3 図書館の利用

1) 年度別利用者の推移

図書館の年間開館日数に大きな変化はないが、一日あたりの利用者数はやや減少している(図9-5)。平成15、16年度の利用減少は、図書館を共有していた看護短期大学および同専攻科の閉校に伴う学生数の減少によるものと考えられる。それに対して貸出冊数は、平成16、17年度に大幅に増加した(図9-6)。理由の一つとしては、学部3年次における演習科目の開講および4年次の専門ゼミや卒業研究の開始による影響が考えられる。学外利用者とその貸出冊数も年々増加し、

看護職者を中心とした地域の医療関係者の利用拡大が進んでいるが、詳細は次節(2)で述べる。

図書館間相互協力については、開学当時は文献複写を他館へ依頼することが圧倒的に多かったが、現在は受付件数が大幅に増え、名実ともに相互協力となってきた。平成17年度から文献複写の学外からの受付が急増した理由は、国立情報学研究所のILL文献複写等料金相殺サービスに加入したためと、学会誌や新潟県内医療機関の研究報告など所蔵館数の少ないタイトルを所蔵しているためではないかと思われる。資料の現物貸借件数、参考調査件数も年々増加してきており、図書館の様々なサービスが徐々に利用されてきたことがうかがわれる(図9-7,8,9)。

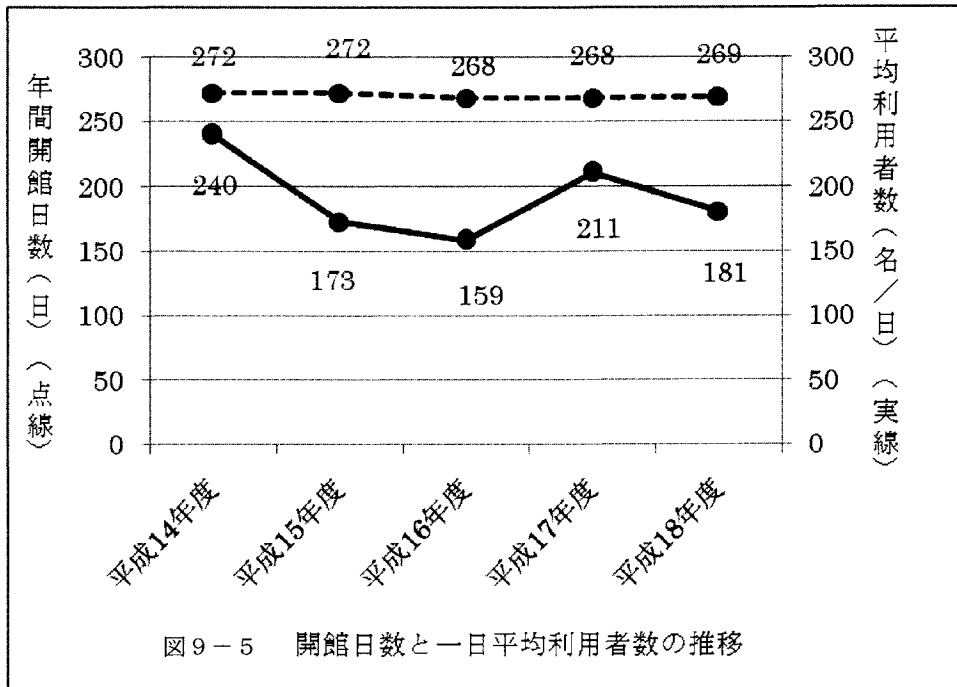


図9-5 開館日数と一日平均利用者数の推移

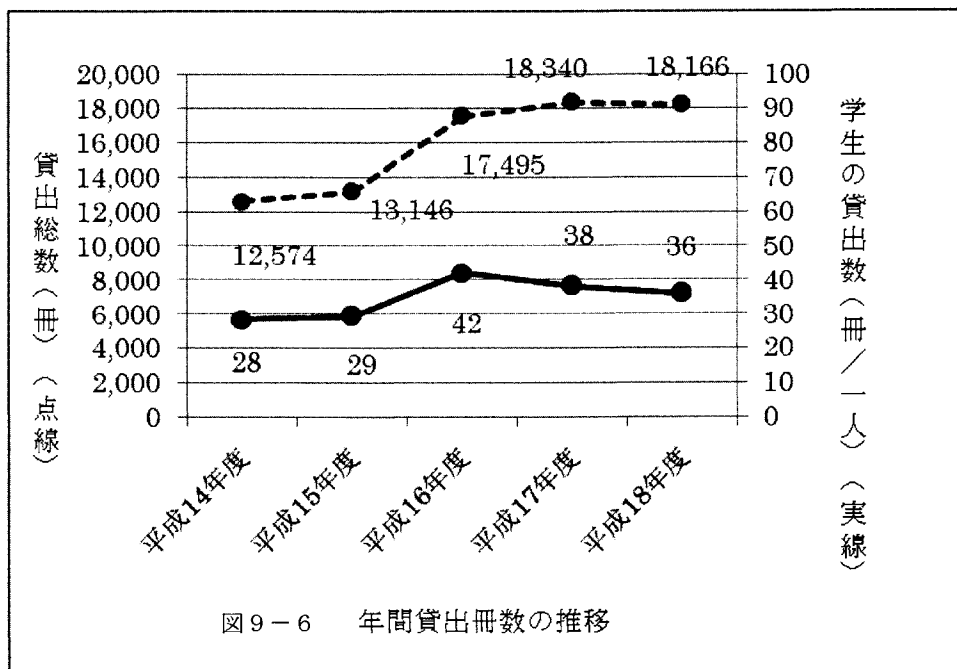
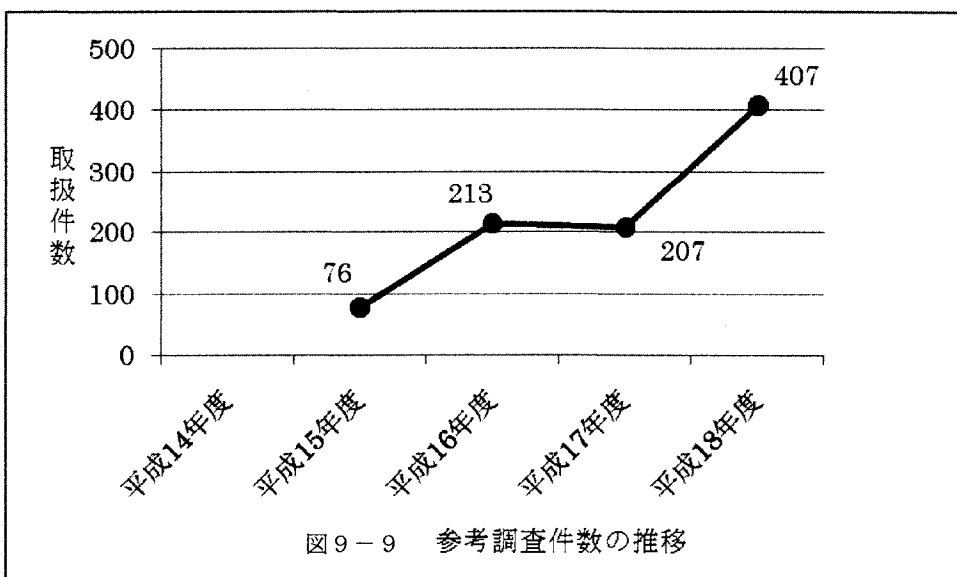
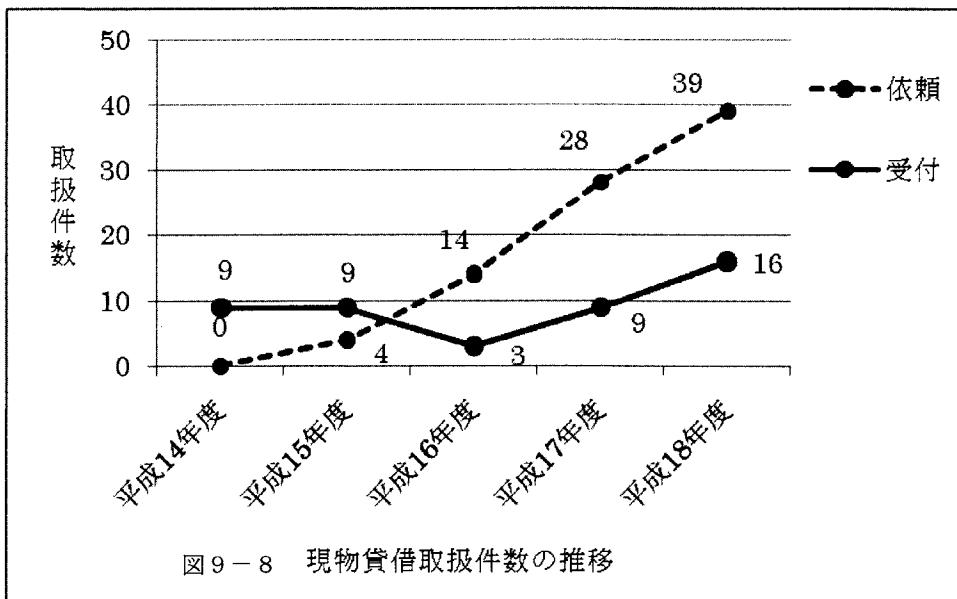
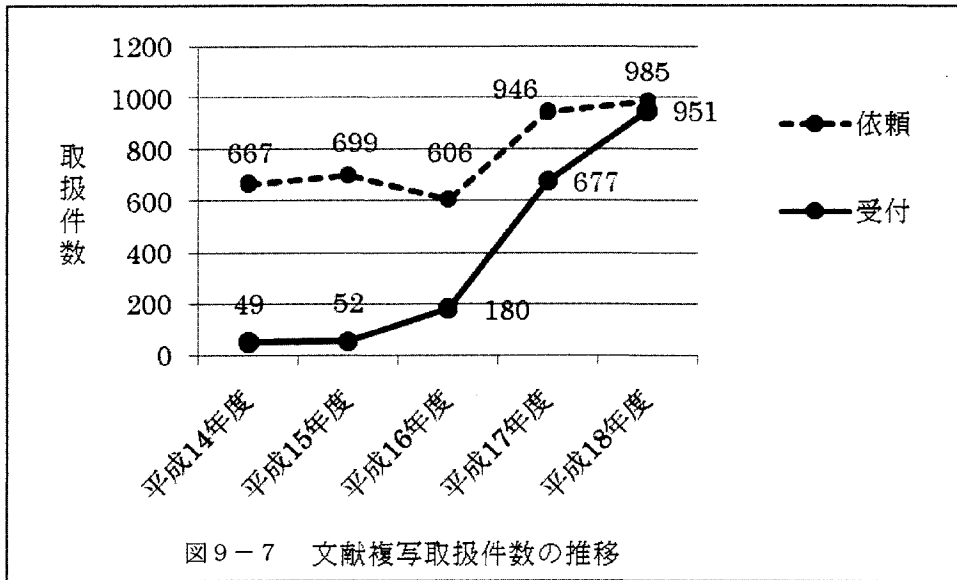
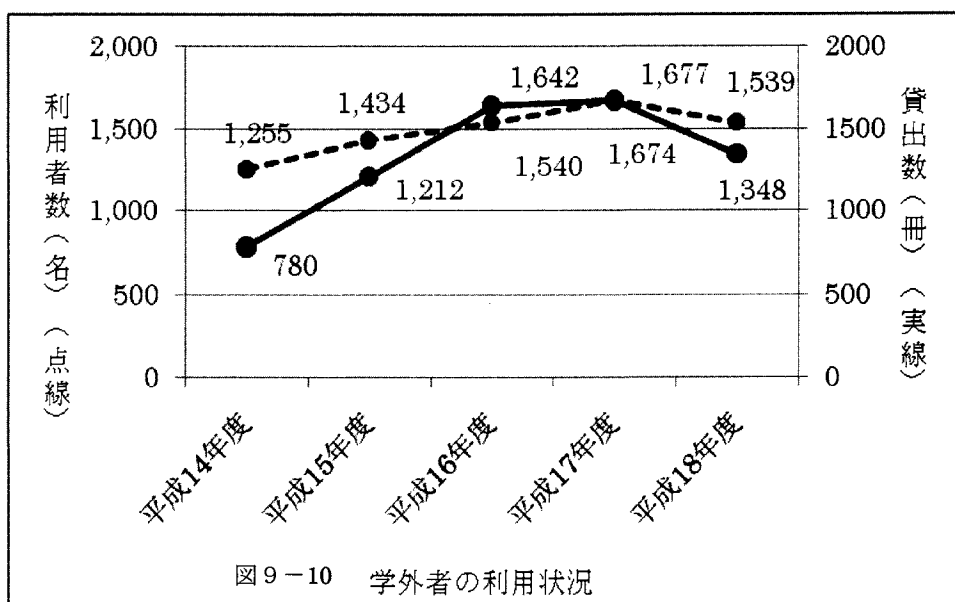


図9-6 年間貸出冊数の推移



2) 年度別学外利用者の推移

図書館は開学当初から、保健・医療・福祉等の関係者およびそれらに関する調査研究を目的とする学外の方に開放してきた（図9-10）。平成17年度が最も利用が多く1,674名であった。ちなみに地元上越地区の看護協会会員数は約1,500名である。学外利用者の多くは地元病院勤務の看護師であるが、その外の医療関係者の利用も多い。一般市民の利用はほとんどなく、本学図書館が看護の専門図書館を目指しているために一般図書が極端に少ないためと考えられる。



4 課題・問題点及び改善方針

1) 設備について

図書館の規模はやや手狭なため、問題点としては閲覧席が80席と1学年の学生数を満たしていないこと、グループ学習が可能な閲覧学習室がないこと、マルチメディア閲覧ブースのプライバシーが確保できていないこと、図書館事務室が閲覧空間と分離されていないこと等が挙げられるが、何れも建築構造そのものの課題であり、現時点での早急な解決は困難である。しかし天井ファンの設置、ビデオプレーヤーからDVDプレーヤーへの切り替え、検索用パソコンの増設、持ち込みノートパソコン利用可能閲覧席の設置、防犯・防災設備の整備等、現構造物での可能な限りの環境整備に努めてきた。

2) 他機関との相互協力と利用者支援について

NACSIS-ILLにより効率的な相互協力体制が整い、文献複写サービスや現物相互貸借に対する処理能力が向上した。また、県内の大学図書館との連携協力体制も整い、今後は所蔵図書の横断検索を可能にするなど、更なる利用の利便性向上に努めたい。文献検索、図書検索の講習会を開催してきたが、参加者が少なく、今後は広報活動を含め適切な開催時期や時間帯を検討していきたい。

3) 資料の整備について

平成 17, 18 年度には、大学院設置に伴う特別整備予算による資料整備が進み、学生一人当たりの蔵書数は 125 冊/人となった。国内の県立看護大学 9 校の平均蔵書数は 52, 444 冊（平成 16 年度調べ）である。今後蔵書数 50, 000 冊を目指し、購入経費の見直し等を進めなければならない。

洋書所蔵率は 17. 1%であり、目標の 20%に達していない。平成 17 年度文部科学省が行った実態調査結果（全公立大学の洋書所蔵率は平均 28. 9%）と比較すると、今後さらに洋書の充実に向けて努力しなければならない。

購読雑誌のタイトル数は 165 であるが、購読費が高騰しこれ以上の増加を望むことは不可能で、予算の見直しと同時にむしろ削減を検討しなければならない状況である。対策としては当然電子ジャーナルの導入が考えられるが、いまだ実現していない。電子ジャーナル導入を目指して予算の見直しを早急にすべきである。オンラインデータベースの契約についても、利用頻度の低いものを見直すことが必要である。また、同時に本学の研究成果を発信できるよう強化しなければならない。

4) 利用状況について

平成 18 年度の利用者数は伸び悩んでいるが、貸出冊数はそれほど減少していない。このことは、インターネットの活用等により WebOPAC で所蔵を確認できたり、ネットで論文そのものを入手できたりと図書館に直接足を運ばなくても情報入手および文献利用ができる環境が整ってきたことが原因ではないかとも考えられるが、今後の統計とその分析が必要である。

開館日数については、公立大学の平均が 253 日/年であるのに対し、土曜日開館を実施し 269 日/年と努力が見られる。一日あたりの貸出冊数は 68 冊/日であり、公立大学の平均 62 冊/日をやや上回っている。図書館利用者数と図書貸出数はほぼ一定になってきたが、文献複写と現物貸借などの他館との相互協力に関するサービス依頼がますます増加し、また参考調査などの業務量が多くなってきた。また図書館のコンピュータシステムの維持管理、および利用者に対する情報リテラシー教育の実施も図書館の業務に位置づけられ、司書の業務範囲が年々拡大してきている。大学院の教育環境を整えるためにも、日曜日開館や開館時間の延長なども必要であり、それに伴う専任司書の増員が急務である。

5) 学外者の利用について

地域の医療関係者の利用が進み、本学の使命の一つでもある地域貢献の一部を担うことができていると思われる。これからも学内利用者と同様に、カウンターでのサービス向上に努めたい。